

## 『路傍の石』

吾一は染めもの屋にさらしを置くと、その足ですぐ停車場に駆けつけた。のぼりの列車がくるまでには、少し時間があつたが、うまいぐあいに、追っ手の者もこなかったし、知ってる人にも出あわなかった。

それでも汽車が出るまでは、なんとなく不安だった。自分の腰をおろしている車が動きだした時、彼は、はじめて、自分が自由になったことを感じた。

吾一は汽車に乗ったことが一、二度しかないので、汽車が非常に珍めずしかった。彼はすぐ窓をあけて首を出した。

停車場が、常念寺の大きなやねが、火の見やぐらが、ちいさくなって、うしろへ、うしろへと、ずっと行くのを見ていると、自分の乗っている汽車が、それらのものをけとばしているようで、なんとも言えず愉快だった。

今に見ている。

東京へ行ったら……

彼はそういう心で燃えていた。

今ごろ、店じゃ騒さわいでいるだろうな。大番頭の忠助はどんな顔をしているかしら。主人のまゆ

毛は一層つりあがつたにちがいない。おきぬは……秋太郎は……

彼はいい気もちで汽車にゆられていた。

が、故郷の姿がだんだん見えなくなりかけたら、急に腹の底のほうで、うそ寒くなってきた。

彼は伊勢屋のことしか考えていなかったが、自分の育った町にも、これでいよいよおわかれなんだと思うと、なんとも言えないものが、胸に迫せまってきた。彼は背のびをして、もう一度、町のほうを見かえた。もう、なんにも見えなかった。彼はふと、前にぶらさがった鉄橋のことを思いだした。しかし、これもいつのまにか、通り過ぎてしまった。